

韓国進む沖繩研究

第5回沖繩国際学術会議報告

仲地 清

ソウル大学人類学科主催の「第5回沖繩国際学術会議」が4日、同大学で開かれ、私も参加し、論文発表を行った。東北亜歴史財団が財政支援をし、2006年から5年連続の学術会議である。

日韓沖で9論文

今回は「海洋の世界から見た東アジア」琉球・沖繩の視点のテーマで、琉球・沖繩に関する九つの論文発表が韓国側と日本側からあった。

発表論文は「琉球列島の貿易と韓半島(木下尚子)」、「奄美・沖繩のサンゴ礁の知識と漁労活動」(渡久地健)、「島嶼文化の観点から見た済州と琉球の住居比較」(金泰一)、「朝鮮人漂着民の見た1662-63年の琉球」(渡辺美季)、「清代北京における朝鮮使節と琉球使節の交流」(沈玉慧)、「日本人に偽装した琉球人の済州漂着」(鄭成一)、「米軍政府研究におけるミクロ

ネシアと琉球の連続性と相違について」(泉水英計)、「沖繩戦後史における沖繩県民党・超党派の構成・特質・効果の分析」(仲地清)、「鳩山内閣における普天間問題と日米安保体制の再認識」

ソウル拠点に学会発足

(陳泌秀)であった。

国際会議の発端

琉球大学の津波高志教授も参加した。そもそもこの会議は、津波教授の指導を受けた陳泌秀さん(ソウル大学比較文化研究所研究員)が、人類学の視点から金武町の基地問題を調査し、博士論文に仕上げたソウル大学人類学科に提出したことがきっかけで、同大学が琉球・沖繩研究を深化させるために開いたものだ。

発表論文の内容は、1980年代に朝鮮・済州島に漂流した琉球人に対する朝鮮人・済州人の対応策、清代北京における琉球人と朝鮮人の交流の歴史的分析、また沖繩と済州の住居の比較、分断国家であるがゆえに世論がまことまことに韓国政治文化と比較した沖繩の「県民党・超党派」の紹介などが主な内容であった。



なちち・きよし 1948年宮野座村生まれ。名桜大学大学院研究科長(国際関係論)。著書に「琉球と沖繩の人々」(英文)。

中でも、東北亜歴史財団のリ・ホン歴史研究室長が評価したのは光州女子大学の鄭教授の論文で、これまで、1590年から1861年まで琉球人が朝鮮に漂流した件数は15となっていたが、

21年8月に、済州島に漂流した新発見を付け加えた。発表論文は、「21年に済州島の漂流した琉球人を朝鮮政府は日本人に偽装させた」との新見解を、韓国に残る新発見の古文書で説明した。

共通体験基盤に

これまでの韓国の沖繩研究の蓄積を踏まえて、ソウル大学比較文化研究所内に「琉球・沖繩学会」が正式に発足したのは昨年11月だ。今回の沖繩国際学術会議は同学会の年例会を兼ねている。現在、

東アジア共同社会へ希望

韓国、沖繩、日本、台湾、オーストラリアの沖繩研究者35人が会員だという。ドイツ出身のヨーゼフ・クライナー博士(法政大学特任教授)も加わっている。学会長は全京秀教授(ソウル大学人類学科)が就いた。

韓国における沖繩研究は、1980年代までは、先駆的な学者らによって散発的に行われてきたが、90年代以降、大規模な研究プロジェクトが行われるまでに発展し、近年では沖繩米軍基地、近代史などの深層的な研究が成果を挙げつつあるという。その成果に基づき、基地・観光・長寿などへの大衆の関心も拡大している。

「琉球・沖繩学会」設立の発起文には、それを背景とし



琉球・沖繩に関する九つの論文が発表された第5回沖繩国際学術会議＝ソウル大学(筆者撮影)

た研究深化の狙いと、熱い思いが記されている。要約すると以下のようになる。

「沖繩を日本という国家の一地域としてではなく、琉球王国の連続線上における、独自の歴史と文化を有する地域として理解することを前提とするならば、琉球・沖繩研究は、従来の近代国家中心の歴史観および文化論を超えて、新しい観点と範囲をそなえた地域研究パラダイムを提供してくれる。具体的には、国家を超えた交流史、交流学が重

要となる」

この学会の立ち上げは、韓国の戦後世代の若い研究者から持ち上がったものだ。領土問題を含めて韓国と日本の問題が行き詰まるときがある。発起文の冒頭にあったように、植民地主義と戦争被害の共通体験を受けた韓国人と琉球人であるからこそ、新しい視点からの東アジア研究が生まれるはずだ。そして、そこに「東アジア共同社会」への希望も託されている。